

## 劔岳の地名考 ～「劔岳地名大辞典」のまとめとして～

佐伯邦夫

先に『劔岳地名大辞典』をまとめて、本研究紀要の第13号（2014年刊）にのせた。日本山岳会の『山岳』初期のバックナンバーをはじめ、主要大学・高校の「山岳部報」などの文献を渉猟、採録立項数およそ300になった。さいわい好評をもって迎えられ、各山岳雑誌等でも紹介された。

この編纂作業を通じて新たに気づかされたことをまとめておくのも無駄ではあるまいと思い、本稿の筆を執った。

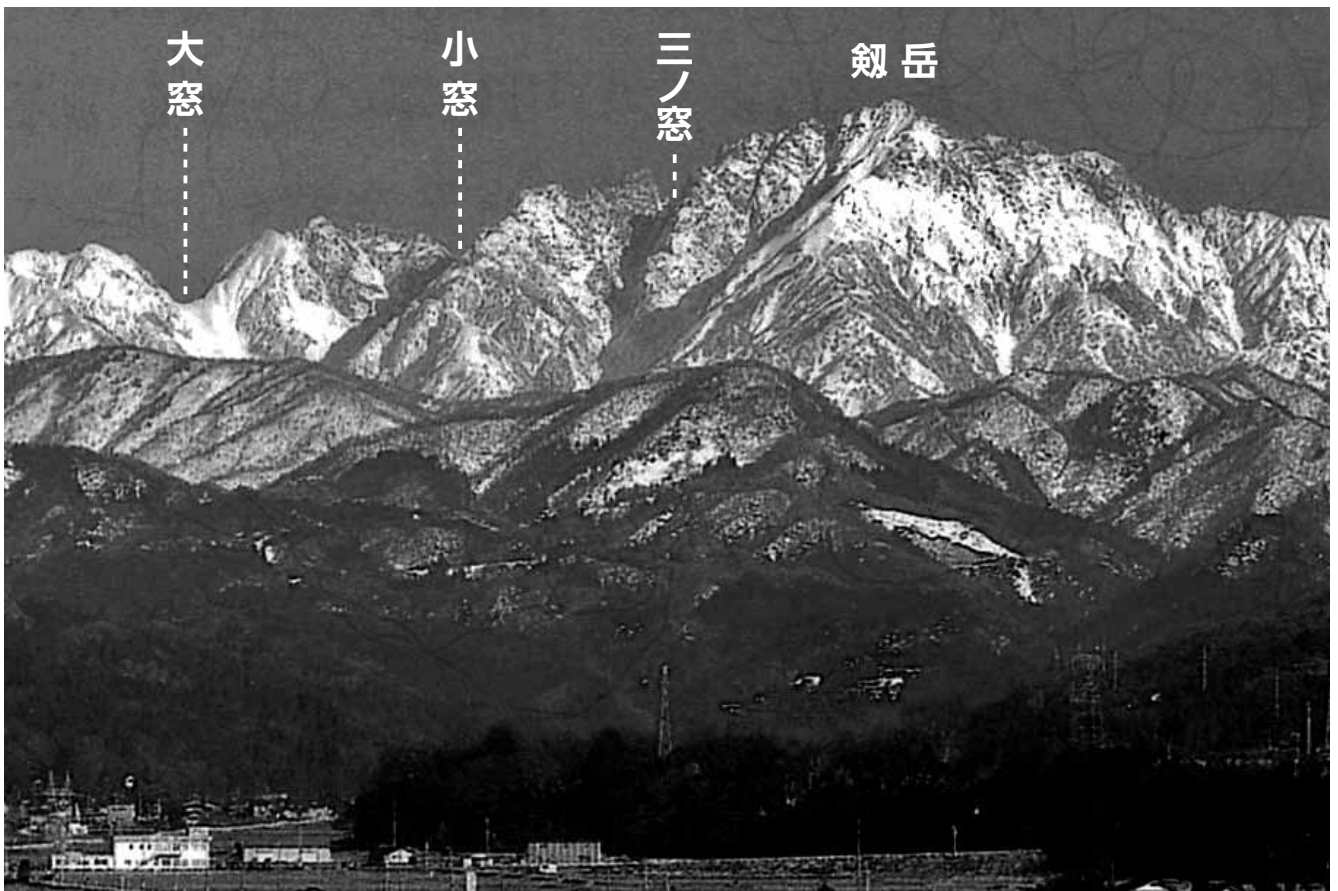
### 1. 「窓」をめぐって

まず取り上げたいのは、大窓・小窓……の「窓」についてである。山稜上の大きな切れ込みのこと。劔岳の北に大窓・小窓・三ノ窓がある。これらは、地名としてユニークで美しい。同様の地形を後立山連峰、穂高連峰などでは”キレット”と呼ばれる。そこで「山稜のギャップを信州ではキレット、越中では窓という……」と一般化されていった<sup>注1)</sup>。

しかし、ほかに「窓」はあるのか。大窓の北、劔

岳北方稜線の赤谷山と猫又山との鞍部は大窓よりもはるかに大きな切れ込みだが、ここはブナクラ峠、さらに北の毛勝山とウダの頭の間の峠（ここは北アルプス中最も深い切れ目）は平杭乗越<sup>ひぐい</sup>である。

南へたどっても、別山乗越、一ノ越、ザラ峠、スゴ乗越、薬師峠…と続き、「窓」はない。なお信州のキレットも同様、三大キレットの他には例がないようである。



劔岳の三窓（上市町から）

しかるに「信州＝キレット、越中＝窓」の公式？に基づいて、三ノ窓以南、山頂までのギャップにも、次々に、〇〇窓の名が与えられていった。現池ノ谷乗越を長次郎右窓、あるいは長次郎東窓、現長次郎の科尔を同左窓、同西窓などと呼ばれたが<sup>注2)</sup>、なぜか育たなかった。冠松次郎は、現ハシゴ谷乗越を内蔵助ノ窓とさえ呼んでいる<sup>注3)</sup>。

頂上以南、別山乗越までの間にもギャップはいくつもある。南から順にクロユリの科尔、武蔵の科尔、前劔の門、平蔵の科尔と、“科尔”（仏＝鞍部の意）が主である。いずれも大正期以後の命名。学生が活動の中心的役割を演じた時代の背景を表している。その中に「門」があが、これは建築用語でくくられる点、窓を意識したものだろう。またそのすぐ近くに「柱」<sup>注4)</sup>の名も与えられたのも同様。しかし「門」は残ったが、「柱」はその後使われることはなかった。

結果的に「窓」は、大窓、小窓、三ノ窓の三つにとどまった。これについて「劔岳の三窓」とまとまって、他のギャップを「科尔＝窓」という公式をもって、簡単に受け入れ難い状況にあったとも考えられる。すなわち三ノ窓の「三」は、三番目の意と解されているが、同時に「三つの」という意味も含んでいたのではないかと思われるのである。「三窓」を「三の窓」と呼べば前者、「三つ窓」といえば後者の意になろう。

「三ノ窓」の初出は、吉沢庄作<sup>注5)</sup>の「黒部方面より劔岳を経て立山に至る記」(『山岳』23年1号)ではなかろうか。これには「これこそ助七の所謂<sup>いわゆる</sup>劔

の三窓、に連なる……」という記述で出てくる。助七は現黒部市音沢のガイド佐々木助七<sup>注6)</sup>。「助七の所謂」は「助七が言うところの」の意。ここをどう解釈するかにかかっている。

なお大窓・小窓の初出を調べたが、今日の時点まではっきりさせられなかった。角川書店・平凡社などの県別地名辞典にも満足な記載はない。なお、劔岳の「窓」をめぐる論考として、冠松次郎の「廊下と窓」(『現代登山全集3』1961東京創元社 所収)、広瀬誠の「劔岳の地名をめぐる」(『立山黒部奥山の歴史と伝承』1984桂書房 所収)、中葉博文「富山県の地名用語 まど(窓)とは」(『越中富山地名伝承論』2009クレス出版 所収)、五十嶋一晃「窓・廊下など、地元先人は形象感覚にたけていた」(『立山ガイド史』2013五十嶋商事 所収)等々がある。しかしいずれからも具体性のある手がかりはえられなかった。

宇治長次郎が、田部重治らと後立山連峰縦走中(1917年)、鹿島槍のキレットにさしかかったとき、「大きな窓じゃ」とつぶやいた、という逸話は、どの文献も申し合わせたように取り上げているが、本当なのか。話ができすぎていないか。ともあれ、劔岳の三つの窓は広く人口に膾炙、今や不動の位置を占めている。なればなおさら“越中では”という一般化は安易な飛躍というべきだろう。

付記すると、現行の国土地理院の地形図(1/25000)には、大窓・小窓はあるが、三ノ窓は記載していない。

## 2. 長次郎谷・平蔵谷・源次郎尾根

平蔵・長次郎の二つの雪渓が相並んで劔岳の頂上へまっしぐらに突き上げているのは見事。これあってこそ“岩と雪の殿堂”と言われる所以といってよい。ここでは人名からとられた地名について。これも劔岳の地名における特徴と言えよう。

ともに劔岳の開拓期を支えた名ガイドの宇治長次郎<sup>注7)</sup>と佐伯平蔵<sup>注8)</sup>の名から。立山山麓のガイド村として芦峠寺はつとに有名。その頭領格が平蔵。一方、長次郎は、常願寺川の対岸、和田村(現富山市)の人。その山人を束ねたのが宇治長次郎だった。

映画『劔岳 点の記』は、1907(明治40)年、時の参謀本部陸地測量部の柴崎芳太郎らの劔岳登頂劇。これをガイドとして支えたのが宇治長次郎だっ

た。この翌々1909(明治42)年、東大生の吉田孫四郎(高岡)ら<sup>注9)</sup>のグループが劔岳に挑む。これが民間人としての最初の登頂となる。ガイドは、請われて再び長次郎がつとめる。ルートは勝手知った長次郎谷。実はまだその名はなく、ここがそれと命名されたのはこの山行においてであった<sup>注10)</sup>。

年譜をたどるのが目的ではないが、これに次ぐ登頂はというと、四年後、1913(大正2)年、日本山岳会の近藤茂吉<sup>注11)</sup>らとされる。近藤は宇治長次郎に加えて佐伯平蔵をも起用、例の通り長次郎谷から登頂。しかし下りは新ルート、別山尾根<sup>注12)</sup>の初下降をもくろむ。この時、身軽にするために隊を二手に分け、カメラなどさしあたり要らないものを長次

郎他一人に託し、平蔵谷を下らせる。そして若く豪胆な平蔵と二人で別山尾根の初下降に成功する。長次郎・平蔵とも立派にそれぞれの仕事を成し遂げる。そこでだ、長次郎谷があって平蔵谷がないのは不都合。山頂に突き上げるもうひとつの谷を平蔵谷にしては……と提案する。

つまり命名の時点では、平蔵はまだ平蔵谷と直接かかわってはいない。なお一言しておくなら、当初は平蔵谷でなく、平蔵沢だった。

これがしっかり定着、劔岳の山体を形成する主要な谷として国土地理院の5万分の1の地形図にも記入されることになる。

両者を分ける間の尾根がこれまた人名からとった源次郎尾根。八ッ峰とともに劔岳の東面を構成する主要な尾根。劔岳の山頂へ直接突き上げるのも見事。そこへ行く前に近藤茂吉へもう一度戻ろう。縁あって近藤の名がまた劔岳の地名として残る。近藤岩(屋)<sup>注13)</sup>である。劔沢二股左岸にある大岩がそれ。成功はしなかったが、劔沢を下降して黒部下ノ廊下へ出ようとした、つまり、劔の大滝下降を初めて試

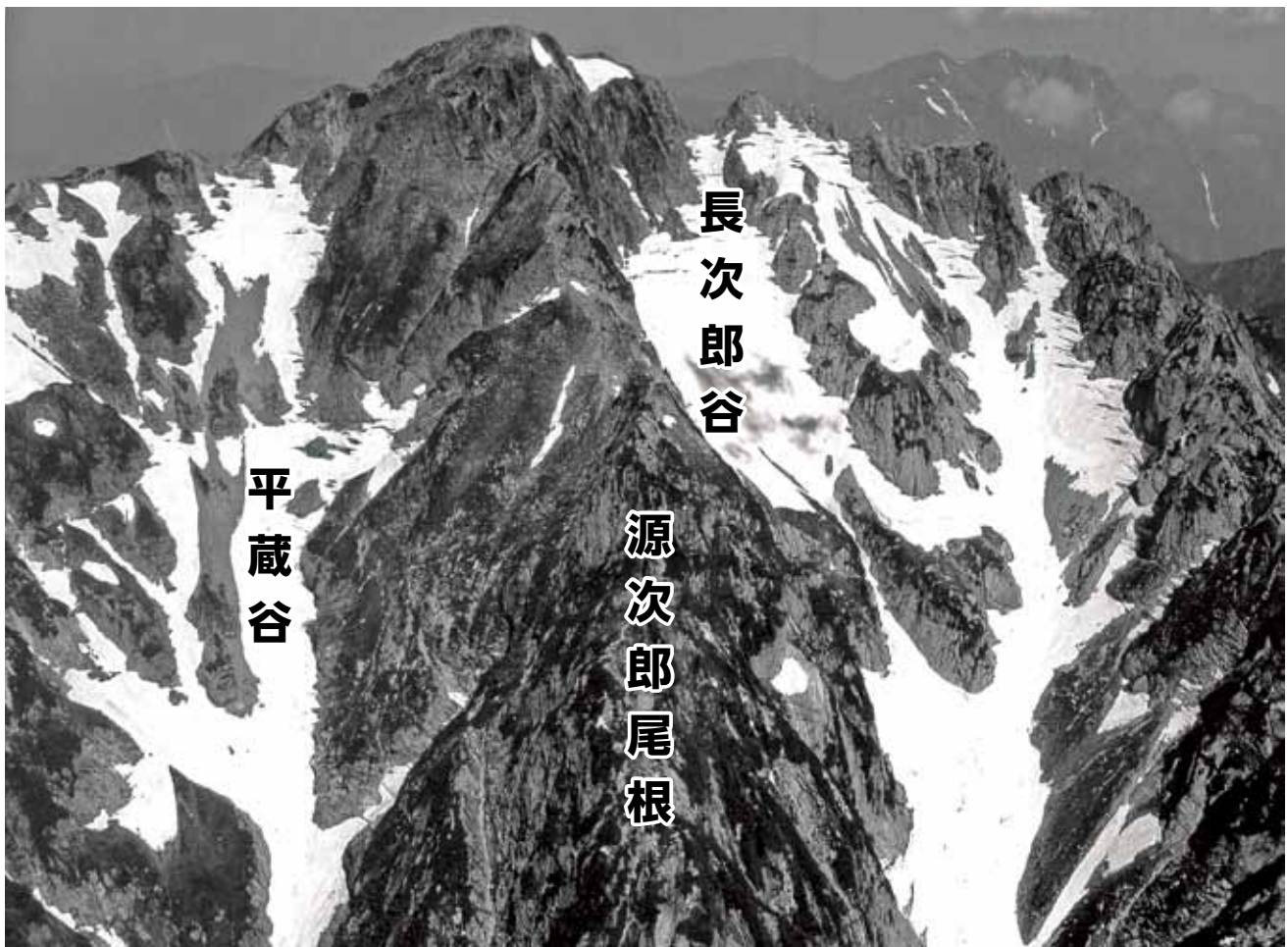
みた<sup>注14)</sup>ことに因む。

さて源次郎尾根だが、正直なところ「またかー」と思ってしまう。長次郎に源次郎と、すぐ近くに○次郎が二つもあるのも紛らわしい。

提案は馬場忠三郎<sup>注15)</sup>とされる。当初からもっとふさわしい名称を、という声があったが、代案も出ないまま、たちまちにして定着した。必ずしもふさわしくないのはどこか。紛らわしさに加えて、彼(佐伯源次郎=芦峯寺)<sup>注16)</sup>の登ったのはあらかた平蔵谷で、尾根の最上部へ出たに過ぎないというところだろう。1924(大正13)年夏のこと。

にもかかわらず、定着してしまうのは、早く名前を…という要求が強かったことがある。柴崎芳太郎の登頂から十数年もたって、劔岳登山はかなり一般化しているのに、東面の最も主要ともいえる尾根に名称がないのはいかにも不都合。

また、源次郎の名が与えられるのは、最上部だけにせよ登った(手を付けた)こともあるが、彼の存在が芦峯寺においてそれなりの重さをもって認められていたからともいえよう。劔沢のモレーンの末端



劔岳東面(空撮) 高橋敬市 撮影

の仮小屋に住み込んで、山小屋（現劔沢小屋）の建設の指揮にあっているといえ、やはり劔岳の主とっていいだろう。

末端からの完登がなされるのは、源次郎の登山の翌1925（大正14）年、第三高校（現京都大の前身）生の今西錦司<sup>注17</sup>・渡辺漸<sup>注18</sup>。それに芦峯寺の佐伯政吉。

かくして劔岳では、人名をもって安易に地名とすることが習慣化する。平蔵谷に並ぶひとつ南側の谷が武蔵谷<sup>注19</sup>、これも芦峯寺のガイドから。時代が少し戻るが、早月尾根を冠尾根と呼び<sup>注20</sup>、東大谷の左俣を丸太谷<sup>注21</sup>などと呼んだがどれも定着しなかった。戦後では東大谷の中尾根を、ガイド佐伯文蔵名をとって文蔵尾根<sup>注22</sup>と呼ぼうとしたがこれも同じ。池ノ谷を、初登攀者石黒清蔵にちなんで清蔵谷<sup>注23</sup>に、と提唱したのは富山の広瀬誠<sup>注24</sup>さんだった。

劔岳ではないが、薬師岳の東面に金作谷があるが、これは宮本金作<sup>注25</sup>から。金作は宇治長次郎の義兄弟、無二の相方で、柴崎芳太郎らの劔岳登頂をはじめ、



宇治長次郎  
冠松次郎 撮影

数々の重要山行に同行、長次郎を助けた。先に源次郎尾根のところで登場の今西錦司らとともに薬師岳から黒部上ノ廊へ下ったことに因む。命名者は冠松次郎。



「サンデー毎日」の表紙になった佐伯平蔵（1922年）

### 3. 転化・派生・拡散

初めに谷の名があって、それをとって山名が決めることもあれば、山の名から谷・尾根などの名が選ばれるということも珍しくはない。前者の例として、劔岳北方稜線の赤谷山・釜谷山などは、山名自体が直接的にそれを語っている。毛勝山などもそれで、同山の山頂に置かれた二等三角点の点名は毛勝谷である。明治中期において、毛勝谷の名ははっきりしていたが、ピークの名としてはまだ不確定だったことが想像される。

後者の例として立山川・白萩川・真砂沢・別山谷・浄土沢…など、いくらでもある。劔岳の場合は、もちろん後者。まず山名があってそこから劔沢や劔尾根、あるいは前劔…などが生まれていった。劔岳の山容とその呼び名のゆるぎなさを物語っている。劔沢は劔岳の東面・北面の水を集めて黒部下ノ廊下へ運ぶ劔岳の最も代表的な谷。劔尾根は、池ノ谷へ、

げんこつのように突き出た、これまた劔岳を代表する岩尾根。華々しい登攀合戦の舞台となった。

前劔は、前穂高岳などと同様、前衛峰。そこからさらに前劔西尾根・前劔沢・前劔西壁などの語が生まれる。劔岳からすれば孫語ということになるだろうか。

こうした派生語をいくつも生んだ地名として別山があげられる。すなわち別山乗越・別山尾根・別山平・別山沢・別山北峰・別山岩場等々がある。別山の頂上は劔岳を仰ぐ重要地点だが、劔岳の明治、大正の開拓期にその拠点としてただならぬ存在感をもっていたことを物語っている。

小窓もまたそうした言葉だ。まず小窓谷。劔沢北股の源流で、小窓に突き上げる谷。その雪渓が最近、現存する氷河といわれて話題になり、広く知られるようになった。小窓山はないが、小窓尾根があって、ここに小窓ノ頭、小窓ノ王があり、小窓妃や小窓ス



ラブ（英＝一枚岩）などの名称も生んだ。

長次郎谷でも同右俣、左俣が生まれ、長次郎尾根・長次郎ノ頭・長次郎ノコル・長次郎岩屋…という具合に拡散してゆく。平蔵谷また平蔵岩・平蔵ノ頭・平蔵のコル…と。池ノ谷からは、池ノ谷尾根、池ノ谷乗越、池ノ谷右俣奥壁、池ノ谷ゴルジュ（仏＝峡谷）…。

派生語・関連語が圧倒的に多いのは何と云っても仙人だろう。十指をはるかに超え、別山・小窓の比ではない。もちろん仙人谷も仙人山もある。しかし、「山」「谷」どっちが先という議論は、ここの場合、さほど重要ではなさそうである。両者とも派生したもののように思われるからである。

山中の人煙隔絶の地を仙境などという。黒部奥山一帯はすべてそれ。そこに温泉などがあれば決定的というものだろう。至近距離に恰好岩屋があったの

も幸い。仙人窟である。ということで、仙人の湯、あるいは仙人岩屋こそが一連の地名の核だったのでは。そこへの経路が仙人谷（黒部下ノ廊下支流）、その詰めが仙人峠であり、また仙人山となったのでは。それを基準に北仙人山、西仙人山等々が決まっていく。

一連の仙人〇〇の中心は、黒部奥山山中にあったのだが、黒部の流域とは全く別の早月川流域、白萩川の源流に西仙人谷・東仙人谷・中仙人谷があるのはどういうことか。半ば奇異ともとれよう。これらは厳しい山を越えてもそこ（仙人）へ行くためのいくつものルートをしめしている。このことから黒部下ノ廊下の通行の困難さ、あるいは仙人境の魅力、重さ、などなどいくつものことが見えてくる。なお東・中・西の三者のうち、東仙人谷は、仙人の湯への経路とは考えにくく、単に西仙人谷の対照的な意味から与えられたものと思われる。

#### 4. 外来語、そして記号略号化

明治維新以後、外来語が怒涛のごとく日本語の中に入ってきたことは周知のとおりだが、登山の場合も例外ではなかった。登山界における黒船来航は、

明治維新から大分遅れる。いろいろの区切りはあるが、何と云ってもそれは楢有恒<sup>注26)</sup>のアイガー東山稜（スイス）初登攀は最も大きなエポックとみて



劔岳 東面・北面 『山と溪谷』959号（2015年）から

よい。1921（大正10）年のこと。

登山の流れの中心は大きくアルピニズム（欧風登山）へ向かう。劔岳のハッ峰の初登攀は、それから下ること3年、1923（大正12）年、早大の小笠原勇八、学習院の岡部長量らによって。今西錦司（既出）らの源次郎尾根登攀はその翌々1925（大正14）年だった。チンネはそのまた翌々1927（昭和2）年、同じく今西らによる。

ピッケル・ザイルなどの登攀用具、アンザイレン（独＝安全確保のため相互にザイルでつながりあう）・ジッヘル（独＝ザイルによる登攀中のパートナーの安全確保）などの登攀用語だけでなく、地形用語もまた少なくなかった。

壁はフェース・バットレス、円形のピークはドーム、稜角・岩稜はリッジ（英）、アレート（仏）、グラート（独）などと呼ばれ、岩稜、山腹に食い込んだ急な岩溝はルンゼ（独）、ガリー（英）、クーロアル（仏）……。

岩山劔岳は、これらの語をすんなりと受け入れてほとんど不都合はなかった。というより、たとえば「ルンゼ」などは、それに相当する和語を探すのが困難だったということもある。

チンネ、クレオパトラニードル、マイナーピーク

（いずれも第三高校生今西らの命名）などというカタカナの名称も、近代登山をはぐくんだ劔岳の特徴を際立たせる地名としてすぐに定着した。

登りこまれるにしたがって、Aフェース、Bフェース、Cフェース……と細分化され、ルンゼがまた1ルンゼ、2ルンゼ、3ルンゼ……と。さらには、ピークは「P」、ルンゼは「R」と略されるようになった。

本峰南面には4本のバットレス（英＝側面から支えるような急峻な岩稜）が並んでいる。これらは、向かって右からA1～A4と呼ばれ、特にA1・A2は初級的なクライミングルートとして親しまれている。なお「A」はアレート（仏＝瘠せた岩稜）の略。ここにこれがあるがために、反対側東大谷のそれは、G1～G4と呼ばれ、本峰北壁のそれは、L1～L6。「G」はグラート（独＝岩稜）、「L」は何か不詳。

記号・略号である。ありていに言えば、簡潔・合理的だろうが味気ない。それぞれが持つ個性や特徴が見えてこない。

これらはいずれも戦中から戦後にかけて最も活躍をした地元富山高校（現富山大の前身）によって、劔尾根のR1～R10、 $\alpha$ ルンゼ・ $\beta$ ルンゼ・ $\gamma$ ルンゼなどは魚津高校の命名とされる。「R」はルンゼ。



森下 恭 写真集『劔岳』（山と溪谷社 2009年）から

## 5. 富山高校・魚津高校、そして戦争

穂高岳に松高ルンゼや松高ルートなどがあるように、地元の高校や山岳会の活躍が地名に記念されることは他にもある。それにしても劔岳では富山高校（現富山大の前身）の関わる地名が際立っている。魚津高校また然り。富高は東大谷において。一方魚津はチンネや劔尾根に。これらの地域に富高〇〇、魚高〇〇という名称は必ずしも多いとはいえないが、整理、統一、発表したのが主として両校だった。

富山高校山岳スキー部の創設は1927（昭和2）年とされる。その後の同部の活動に大きな転機を与えたのは、昭和8年、創校10周年記念事業として大日岳ヒュッテが建設されたことだろう。今日の大日小屋の前身。その後の活動の重要な拠点となった。

ここからの劔岳と言えば東大谷そのもの。ヒュッテにあって、日がなそれを眺めていれば、登攀意欲に駆り立てられるのは成り行きというもの。室堂乗越から立山川を下降するだけだからアクセスまたよし。

ここを足掛かりに東大谷へのアタックが波状的に繰り返された。1941（昭和16）年に勃発した太平洋戦争<sup>注27</sup>によるライバル他校の活動の停滞がこれを助けたともいえよう。その過程で、舌滝・カスミの滝・富高ルンゼ・チョン（グ）ラピーク、あるいはクロユリ谷・キンバイ谷・コマクサルンゼ…などの名称がほとんど独壇場のように決められていった。活動は戦後に持ち越され、その中俣完登（初登攀）を見るのは1947（昭和22）年7月だった。

1950（昭和25）年、戦後の学制改革により富山高校は閉校、新制の富山大学へその文理学部として組み入れられることになる。部史<sup>注28</sup>の最後に「昭和25年2月部報第6号を発刊して最後を飾り（中略）テント、ザイルなどの装備、図書が、富山大学へ進学した高瀬宗章<sup>注29</sup>によって富山大学山岳部へ引き渡されたのである」とある。

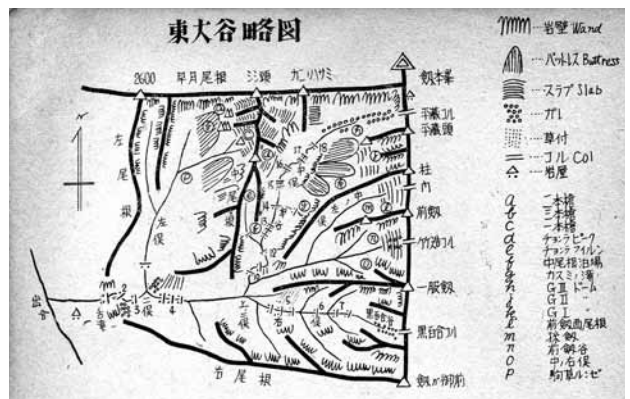
かくして富山高校山岳スキー部はその歴史を閉じる。同部OBは「劔稜会」を名乗り、なお劔岳を舞台に活動を続けた。

さて次に急ぎ魚津高校へ行こう。魚津高等学校は1948（昭和23）年4月 学制改革により旧制魚津中学、同實業学校などを統合、発足した。その山岳部は劔岳を舞台として、盛時の旧制高校を思わせる活躍を展開するのはなぜか。

ここで旧制富山高校閉幕の時に登場した高瀬宗章が再び登場。装備、その他は富山大学山岳部に引き継がれたが、旧制高校のもつ高いノウハウは、もう一方で同氏の弟で、魚津高校山岳部創立メンバーの一人、高瀬具康<sup>注30</sup>へそのまま流れていくことになる。

それは抽象的な意味としてではなく、登攀活動を通じて直に行われた。高瀬兄弟で、あるいは劔稜会・富大・魚高の三者の部員・会員が垣根なくザイルパーティ組むこともあった。

そしてここでもまた山小屋が拠点として関係する。詳細は他に譲るとして、2シーズンながら、劔岳北面の池ノ平小屋の管理運営が魚津高校山岳部に任されたのだ。1949同50（昭和24・25）年のこと。部員は夏休みいっぱいここに詰め、交代で登山者の賄



東大谷の地名 若林啓之助（劔稜会）作図  
『岳人』39号（1951年）から



『岳人』39号と高瀬宗章の執筆記事

いにあたる。その傍ら三ノ窓の前進基地に上がり、チンネ・劔尾根・などをくりかえし登攀した。山小屋経営による収益が活動を支えたことも見逃せない。

その成果は高瀬宗章によって『岳人』39・40号(1951)に発表された。50枚におよぶ歴史的大作だった。それには地名に関わる状況を序段で次のように断っている。

「戦前の優秀な先蹤者諸氏の記録、文献等が手許にないので、主として私達のグループで登ったルートについて説明する。私達とは旧富高山岳部、富大山岳部、魚津高校山岳部である。」とし、参考文献としてそれぞれの部報等を上げ、「名称は大部分これらに倣った」としている。それはほとんど乱暴なくらいに「私達」流で貫かれていたのであった。その理由を一言でいえば、戦争による情報・記録の断絶である。ともあれそのあらかたが今日へ引き継がれていくことになった。

劔尾根の命名、あるいは初出とともに、旧来の地名と、高瀬のいう「私達」が与えたそれを精査することがチンネ・劔尾根研究の今後に残された一つの課題と言えよう。

## 6. 命名に関わって

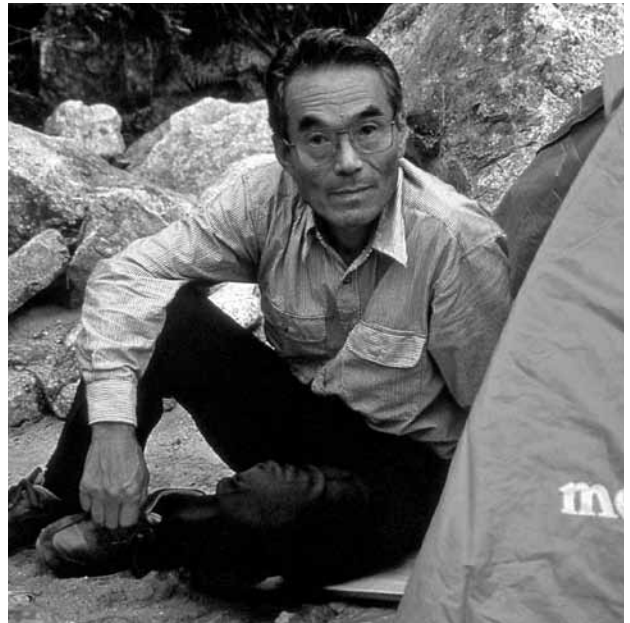
1956(昭和31)年10月、魚津岳友会創立その年だった。筆者を含めた会員三名で、立山川支流の毛勝谷を登攀、早月尾根2600mへ抜けた。これが同谷の確かな最初の記録とされる。

おもなる尾根・谷に通り名前を付けて概念図をまとめ、会報『ZINNE』創刊号(1956)に記録を発表。これが翌年、『岳人』124号に転載された。

真ん中で大きく二分した左右の谷を、右俣、左俣としたのは型通り。内部の尾根は、西から順に第1尾根～第4尾根とした。第2尾根の末端が絶壁となって右俣になぎ落ちている。これを衝立岩とするなど、穂高や谷川岳などを含めた前例に倣っている。筆者18歳。業界一般に並ぼうとする精一杯の意図が読める。

よく知られる、仙人池から仰いだ、鋭鋒を連ねた劔岳は、八ッ峰の北面ということになる。この一帯も記録がなく、戦後に残された地域だった。魚津岳友会がこの開拓に取り組んだのは1970年。それからおよそ10年、巨大な恐竜のような尾根の側面

余談を一つ。先にあげた『岳人』39号に、足立源一郎画伯の劔岳を描いたスケッチにエッセイを添えた見開きのページがある。そのエッセイの中に「池ノ平では魚津高校山岳部員には大変お世話になって……」というくだりがある。



高瀬具康 白萩川で(1998年)

に食い込んだ岩溝の開拓を一応終えた。その過程でこれらのルンゼについて新たに名称を与えた。それについて考慮した点を、中間報告の形で発表した『岳人』323号に記している。要約しつつ次に引用する。

①〇〇ルンゼなどの外和昆成語を避け自然な日本語になるよう考慮した。②地形の特徴に即した名称を選んだ。③他に類似のものがない。④わかりやすく簡潔な名称をこころがけた。

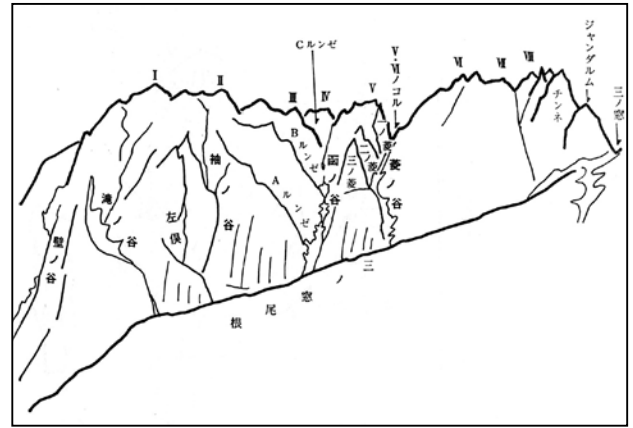
いずれも三ノ窓谷の支流になるのだが、下流から順に口ノ谷(最初の谷だから)、壁ノ谷(中間部が豪快な岩壁になっている)、滝ノ谷(中間に半月形の大雪山があり、ここからの水流が大きな滝をなす)、袖ノ谷(滝ノ谷の下端に沿うようにそそぐ)、函ノ谷(箱のように両岸が切り立っている)、菱ノ谷(右岸に絶壁を連ねている)、とした。これらは開拓の総まとめとして記録とともに『岳人』400号に再度掲載、次第に認知されていった。

そのおよそ10年後、この地域は積雪期の開拓期に入る。我々の開拓、ならびに命名はルンゼであっ



たが、積雪期は、ルンゼとルンゼの間の稜がルートとなる。それら稜の名称を、この方面の開拓・研究の第一人者、和田城志氏<sup>注31)</sup>が、それぞれの谷名に即して、菱ノ稜、函ノ稜、袖ノ稜・・・などと命名した。

本稿執筆中、雑誌『山と溪谷』959号(2015年3月号)は「空撮 日本の名峰」を新連載。その第一回が劔岳なのうれしい。解説は田中幹也氏<sup>注32)</sup>。その中で八ツ峰北面を、その菱ノ稜、函ノ稜、袖ノ稜などの名とともに取り上げ、日本最難のルートと位置づけている。



八ツ峰北面 (仙人池付近より)

## 注 釈

注1 現行の『広辞苑』(岩波書店)の「窓」の項に「山稜がV字形に切れ込んで低下したところ。風の通ることから出た語。越中でいう。信州では「きれっと」という」とある。最新版『登山用語データブック』(山と溪谷社 2011)の場合は「尾根上の低く窪んだ所。(中略)キレットは主に信州側の人に、マドは越中側の人に使われる言葉。」

注2 吉沢一郎著『登高記』(古今書院 1930) 他

注3 冠松次郎著『劔岳』(第一書房 1929)

注4 『岳人』39号、(P.27 図)

注5 吉沢庄作(1872 - 1956) 魚津市生まれ。黒部市の人、日本山岳会員、魚津中学教諭。黒部祖母谷から白馬岳へのルートをはじめ、開拓期の北アルプス北部を舞台に活躍。博物学者、文学者、教育者としてもすぐれた功績を残す。

注6 佐々木助七(1865 - 1945) 本名助三郎。黒部市音沢の人。黒部峡谷をテリトリーとしたガイド。

注7 宇治長次郎(1872 - 1945) 柴崎芳太郎らの劔岳の近代の初登頂、冠松次郎らの黒部下ノ廊下の初遡行などをリードした山岳ガイド。大山登山案内組合初代代表。

注8 佐伯平蔵(1878 - 1943) 近代登山草創期に活躍した山岳ガイド。立山案内人組合初代代表。

注9 吉田孫四郎(高岡) 河合良成(福光町) 野村重義(船橋村)。以上3名は四高出、東大生。石崎光瑤(福光町 25歳) 画家。ともに日本山岳会。ガイド宇治長次郎、ほか二名。

注10 同谷「熊の岩」の命名も同じ。出典「越中劔岳」吉田孫四郎(『山岳』5年1号所載)

注11 近藤茂吉(1883 - 1969) 千葉県出身、日本山岳会名誉会員。

注12 頂上から南へ前劔を経て別山乗越までの尾根。今日の一般コース。

注13 劔沢の北股、南股合流点左岸にある大岩。中が空洞になっており岩屋としても活用される。

注14 1919(大正8)年7月劔沢の下降を試みたが成らず、仙人谷を下降、黒部川を渡河、牛首尾根から鹿島槍ヶ岳に登頂。以来この名。それまでは劔沢の岩屋と呼ばれた。

注15 馬場忠三郎(1903 - 1977) 長野県出身、明治大山岳部OB。劔岳八ツ峰のクレオパトラニードル初登攀など。

注16 佐伯源次郎(1875 - 1948) 芦峯寺の人。劔沢小屋の建設・管理。

注17 今西錦司(1902 - 1992) 京都市出身、登山・探検の開拓者。第三高校山岳部時代、劔岳源次郎尾根・チンネ・八ツ峰の各フェースなどを初登攀。第12代日本山岳会会長。文化勲章受章。

注18 渡辺漸(1903 - 1984) 東京都出身。1925(大正14)年7月、今西錦司、時には佐伯政吉(芦峯寺)を含めて源次郎尾根・八ツ峰に登攀した。渡辺漸「劔岳新登路と八ツ峰」(『山岳』21年1号所載)は、その記録。序段で、劔岳の過去の記録を、各コースにわたり縦覧するなど、詳細を極め、登攀史研究上きわめて

高い価値を有する。またこれによって、劔岳頂上から長次郎谷を初めてスキー滑降したのが、この時の今西・渡辺両氏であったことが知られる。

- 注 19 佐伯武蔵（芦峠寺）が昭和の初年、平蔵谷と間違えてこの谷を登ったことからこの名。
- 注 20 1931（大正 6）年、初登破した冠松次郎に因んでそう呼ばれた。
- 注 21 1929（昭和 4）年、東大谷左俣を登った吉沢一郎（東京商大＝現一橋大 OB）らをガイドした丸太丈次郎（早月谷蓬沢）の名をとり、一部で東大谷左俣をこう呼んだ。
- 注 22 1950（昭和 25）年、劔岳東大谷中尾根の積雪期初登攀に成功した日本医大パーティをガイドした佐伯文蔵（1914 - 1991 芦峠寺）に因んでこう呼ばれた。
- 注 23 石黒清蔵（1898 - 1967）富山市生まれ、日本山岳会会員。1924（大正 13）年ガイド佐伯八郎とともに池ノ谷左俣を初下降。翌 1925（大正 14）同右俣を登攀劔岳頂上に達した。
- 注 24 広瀬誠（1922 - 2005）富山市の人、日本山岳会会員。富山県立図書館長。歌人・郷土史家として活躍、後進を啓発すること甚大。著書に『立山と黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房 1984）他多数。
- 注 25 宮本金作（1873 - 1927）大山町（現富山市）の人。命名のもとになった山行は 1922（大正 11）年 8 月、今西錦司、西堀栄三郎（第三高生）らと。
- 注 26 槇有恒（1894 - 1989）仙台生まれ、慶大卒。1956 年日本山岳会第 3 次マナスル登山隊長として初登頂に導く。第 4 代、第 7 代日本山岳会会長、英国山岳会名誉会長。
- 注 27 太平洋戦争は、1941（昭和 16）年、ハワイ島真珠湾米軍基地に対し、日本軍の奇襲攻撃によって勃発、4 年後 1945（同 20）年 8 月、すべてを失い尽くして敗戦（無条件降伏）した。
- 注 28 「富高山岳スキー部小史」（『上れ雪溪—旧制富山高等学校山岳スキー部誌』1993 剣稜会刊所収）
- 注 29 高瀬宗章（1929 - 1995）富山県出身、剣稜会・富山大学山岳部 OB、薬学博士。劔岳源次郎尾根 1 峰平蔵谷側側壁をはじめ、劔岳に多くの初登攀の足跡をしるした。
- 注 30 高瀬具康（1932 - 2009）富山県出身、長崎大学卒。兄宗章の影響のもと、新制魚津高校山岳部を初登攀至上主義ともいえる先鋭的な方向へ導いた。劔岳に多くの初登攀の足跡をしるす。高須茂との共著で『劔岳 登攀ルート解説』（築地書館 1956）を著わす。
- 注 31 和田城志（1949 - ）高知県出身、大阪市立大山岳会、サンナビキ同人。冬の黒部川横断などのストイックな山行をひたすらに実践。著書『劔沢幻視行』（東京新聞 2014）。
- 注 32 田中幹也（1982 - ）神奈川県出身、登攀クラブ蒼氷所属、南北アルプス難ルート多数の冬季初登攀、厳冬期カナダ横断 22,000km 走破など。2013 年「植村直己冒険賞」受賞。

## ■ 佐伯邦夫プロフィール

1937 年生まれ。魚津高校山岳部で高瀬具康の薫陶を受け、高須茂のあとを慕い大東文化大に学ぶ。両先輩で著した『劔岳 登攀ルート解説』（1956 築地書館）の、その後の数次にわたる増補改訂作業を引き継ぐ。

劔岳では 1956 年毛勝谷を登攀。また魚津岳友会を率いて小窓尾根・ハッ峰北面の開拓などにあたる。著書に『劔岳をどう登るか』（1976 北国出版社）他。